

令和元年6月27日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03227

研究課題名(和文) 行動理論に基づく大学生の自己成長を促す挑戦的課題達成型授業の開発とモデル構築

研究課題名(英文) Development and model construction of challenge task achievement type class to promote self-growth of university students based on behavior theory

研究代表者

橋本 公雄 (HASHIMOTO, KIMIO)

熊本学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90106047

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は大学体育授業で自己成長を促すため、挑戦的課題達成型の授業プログラムを開発し、その効果を明らかにするとともに、体育授業による自己成長の仮説モデルの検証を行うことを目的としたものである。仮説モデルは主観的恩恵の獲得が新たな気づきを生みポジティブ徳性(人間の強み)を向上させるというものである。仮説検証のため体育授業版の主観的恩恵尺度、気づき尺度、ポジティブ徳性尺度の3つの尺度を開発した。これらの指標を用いて、気づきを媒介変数とした挑戦的課題達成型授業による自己成長を促す仮説モデルを検証することができた。加えて、学期末に主観的恩恵、気づき、ポジティブ徳性の向上がみられることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学体育授業の教育目標として、技能向上、健康・体力向上、運動に対する好意的態度形成などを掲げる大学は多いが、これらの教育目標は体育授業の恩恵を表したものである。本研究では、体育教育の目的を自己成長とし、その指標としてポジティブ心理学の研究領域のポジティブ徳性とした。挑戦的課題達成型授業プログラムを開発し、その効果を恩恵、気づき、ポジティブ徳性というメカニズムで捉えモデルの検証を行った。

このような体育授業研究の例はなく、大学体育授業で人間的な成長を図れるモデルを構築したことから、新たに大学体育教育の目的・目標を見出すことができ、学術的意義と社会的意義はきわめて高いといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an educational program, to clarify its effects, and to test its hypothesis model in order to enhance students' self-growth through university physical education in which students try to achieve some challenging tasks. The hypothesis model was designed so that the acquisition of perceived benefits would create new awareness and develop positive virtue (human character strength) in the minds of the students.

In order to test this hypothesis, three scales were developed: a physical education lesson version of the Perceived Benefit Scale, the Awareness Scale, and the Positive Virtue Scale. Using these three scales, we were able to test the hypothesis model that encourages self-growth of the students by providing students with a type of class to achieve challenging tasks with awareness as a mediator. In addition, it was confirmed that improvement of perceived benefits, awareness, and positive virtue could be observed in students after a semester.

研究分野：スポーツ心理学、運動心理学

キーワード：挑戦的課題達成型体育授業 ポジティブ心理学 ポジティブ徳性 モデル構築 主観的恩恵 気づき  
行動理論 行動変容技法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

本プロジェクト研究の科研費による大学体育授業研究は、平成6年(2004年)からスタートしており、大学体育授業の教育成果を主張できるようなエビデンスを蓄積するということから、今日の学生にみられるメンタルヘルスの悪化、コミュニケーションスキルの低下、体力の低下に鑑み、これらの心理、社会、身体的な健康問題に対処しうる独創的な体育授業プログラムの開発とその効果検証の授業研究を行った。しかし、小・中学校の体育授業研究との差異を図りより高い効果をもたらすため、健康づくりの介入プログラムで用いられていた行動科学に基づく行動変容技法を導入し、理論・モデルベースに体育授業における健康問題に対する効果検証に取り組んだ。しかし、学生の健康問題に対処することが大学体育の目的なのか、人間教育を行うことが重要ではないかということが議論となり、「自己成長」をキーワードとして、自己成長を育む大学体育を模索することにした。共同研究者の根上優氏が「魅力」「価値」「冒険・挑戦」からなる授業プログラムづくりの三元論的相互干渉モデルを構築したので、このモデルに準拠し自己成長を図る授業プログラムの開発を行った。しかし、学内の体育授業で「冒険・挑戦」を含む授業の設定は容易ではなく、しかも自己成長を具体化するところまではできなかった。このように、授業研究は紆余曲折しながら進展してきた背景がある。

#### 2. 研究の目的

この3か年間は「挑戦的課題達成型授業」を掲げ、挑戦的な目標設定とその達成を図ることによって自己成長を促す授業を展開することにし、自己成長も近年台頭しているポジティブ心理学におけるポジティブ徳性(強み、長所)とした。また、大学体育授業による自己成長モデルを構築するため、仮説的に挑戦的課題達成型授業 恩恵 気づき ポジティブ徳性というメカニズムを考え、これを検証することとした。気づきはささやかな自己成長であり、恩恵とポジティブ徳性を繋ぐ媒介変数とした。このため、体育授業版恩恵尺度、気づき尺度、ポジティブ徳性尺度を開発することとした。このことは、大学体育は健康教育やスキル教育を目的とするのではなく、それらをとおして人間教育を行うことを意味し、その方法論を確立することを目的とした。

#### 3. 研究の方法

研究は理論構築班、授業介入班、尺度開発班にメンバーをグループ化して進めた。理論構築班は自己成長を育む大学体育授業のモデル構築を試みた。授業介入班は主に介入法として行動科学に基づく行動変容技法(目標設定法、モニタリングなど)を開発した。尺度開発班は3グループに分かれ、体育授業版恩恵尺度、気づき尺度、ポジティブ徳性尺度の開発を行った。授業の効果は事前・事後の尺度得点の変化で評価し、各メンバーが自らの授業を用いて効果検証を行った。

#### 4. 研究成果

大学体育授業による自己成長のモデルを作成するため、体育授業用特有の主観的恩恵尺度(5因子25項目)、気づき尺度(3因子12項目)、ポジティブ徳性尺度(1因子24項目)の3種類の尺度を開発した。共分散構造分析によって、恩恵 → 気づき → ポジティブ徳性という大学体育授業による気づきを媒介変数としたポジティブ徳性の向上効果のモデルの検証を行った。モデルは確認され、学期末にこれらの尺度得点の増加がみられたことから、大学体育授業で自己成長を促すことができる可能性が示唆された。しかし、健康科学演習型の体育授業はスポーツ種目を用いる実技実習型の授業より効果が低いことも明らかにされた。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

- Kajita K, Kiuchi A, Park, K, Lin PH, Hasegawa E, Nakagawa A (2019) A comprehensive and comparative survey study reveals the current status of physical education in liberal arts higher education courses at colleges and universities in Japan, Korea and Taiwan. 筑波大学体育系紀要, 41.
- 木内敦詞 (2018) 大学体育授業の振り返りと改善のための実践：論と証拠と満足度を支えるリフレクション．大学体育, 45(1): 55-58.
- 安井年文・木内敦詞・片岡悠妃・遠藤俊典 (2018) 大学体育授業における教授行動分析を通じた実践例．青山学院大学人間科学部紀要, 9: 57-64.
- 梶田和宏・木内敦詞・長谷川悦示・川戸湧也・中川昭 (2018) 茨城県の高等教育機関における教養体育の教育システム分析．いばらき健康・スポーツ科学, 34: 31-37.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2018) 体育学習における動機づけ雰囲気，目標志向性，生きる力の因果関係．体育学研究, 63(2): 623-639.
- 瀧本真己・木内敦詞・石道峰典・中村友浩・西脇雅人 (2018) 大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される：大学体育授業を対象とした横断研究．大学体育学, 15: 3-11.
- 梶田和宏・木内敦詞・長谷川悦示・朴京眞・川戸湧也・中川昭 (2018) わが国の大学における教養体育の開講状況に関する悉皆調査研究．体育学研究, 63: 885-902.
- 奈良隆章・金谷麻理子・嵯峨寿・松元剛・木内敦詞 (2017) テキストマイニングによる大学体育授業の教育目標に関する肯定的認知度分析．大学体育研究, 39: 45-52.
- 山崎将幸 (2017) ICT 教材を用いた課題達成型大学体育が及ぼす効果について—初年次体育授業の主観的恩恵尺度 (PBS-FYPE) の変容からの検討—, 東亜大学紀要, 25: 1-10.
- 内田若希・橋本公雄 (2016) 援助行動と関連する社会的スキルの醸成に向けた大学体育授業経験に関する探索的検討．体育学研究, 61(2): 475-488.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・堤俊彦・山本浩二・谷本英彰 (2016) 体育授業における大学生の主観的恩恵評価およびその大学適応感に及ぼす影響性．体育学研究, 61(2): 537-554.
- 木内敦詞・松元剛・日野克博・富川理充・奈良隆章 (2016) 大学体育の成績評価を考える．大学教育学会誌, 38(2): 113-117.
- 藤塚千秋・橋本公雄・栗原武志・石橋剛士 (2016) 身体障害者を対象とした健康科学科目 (保健コース) の受講に伴う自己成長—事例研究—, 熊本学園大学論集「総合科学」, 21(1): 1-17.
- 松本裕史・中西 匠・西田順一・柳 敏晴 (2016) パディシステムを用いたスキー実習が女子大学生の社会的スキルに及ぼす影響：問題解決およびコミュニケーション因子の変化に着目して．健康運動科学, 6: 23-29.
- 小林勝法・木内敦詞 (2016) 大学教養体育の分野別 FD としての e ラーニング教材の開発と評価．文教大学国際学部紀要, 26 (2): 57-66.
- 小林勝法・木内敦詞 (2016) 大学教養体育の大学教員準備教育としての e ラーニング教材の開発と評価．大学体育研究, 38: 13-20.
- 堤俊彦・岡崎美里・金平希・三村幸恵 (2016) グループ遊びを通じた対人相互作用における仲間づくりの支援，大阪人間科学大学紀要, 15, 177-187.

〔学会発表〕(計 13 件)

- 西田順一 (2018) 学修成果にリンクする「挑戦達成」経験—「挑戦的課題達成型」大学体育授業

へのシフトを目指して— .RTD「自己成長,学修成果を導く大学体育—挑戦的課題達成型授業の有効性と実践—」九州体育・スポーツ学会第 67 回大会, 熊本市, 2018.9/16.

西田順一・橋本公雄・藤原大樹(2018)大学体育授業にて学修成果を得るための条件の解明—エビデンスベースの教育の実現に向けて—.日本体育学会第 69 回大会, 徳島市, 2018.8/24-26.

西田順一・橋本公雄・藤原大樹(2018)大学体育授業にて学修成果がもたらされるための条件—決定木分析による検証—.平成 29 年度九州地区大学体育連合春季研修会, 北九州市, 2018.3/13-14.

木内敦詞(2018)挑戦的課題達成型授業に向けた授業設計.ラウンドテーブルディスカッション「自己成長,学修成果を導く大学体育——挑戦的課題達成型授業の有効性と実践——」九州体育・スポーツ学会第 67 回大会, 熊本.

Kajita K, Kiuchi A, Park K, Lin P-H, Hasegawa E (2018) Comparative Studies on the Current Status of Physical Education Courses as Liberal Arts in Higher Education at Colleges and Universities in Japan, Korea and Taiwan. The 2018 International Conference for the 7<sup>th</sup> East Asian Alliance of Sport Pedagogy, Taoyuan/Taiwan.

山本浩二(2018)スキルテストを導入した挑戦的課題達成授業の実践研究—バドミントン授業を事例として—.九州地区大学体育連合平成 29 年度春期研修会, 北九州市. 2018.3.14

木内敦詞(2017)大学体育改善のための 3 つの提案.筑波大学体育センター平成 29 年度第 1 回 FD 研修会, つくば, 2017.5.10

Kajita K, Kiuchi A, Hasegawa E, Kawato Y. (2017) Current status of physical education courses as liberal arts in higher education in Japanese colleges and universities: An overview. The 2017 International Conference for the 6th East Asian Alliance of Sport Pedagogy, Incheon/Korea.

山崎将幸(2017)ICT を用いた大学体育実技授業が学生のコミュニケーションスキルに与える効果.九州スポーツ心理学会第 30 回大会, 福岡.

中須賀巧・杉山佳生(2017)体育学習内容別にみた動機づけ雰囲気, 目標志向性, 生きる力の関係-集団種目体験時と個人種目体験時の特徴-.日本体育学会第 68 回大会, 静岡.

西田順一(2016)体育授業における初年次学生の「自己成長促進モデル」の構築に向けた検討—野外種目を対象としたパイロット・スタディー.九州地区大学体育連合 H28 年度春期研修会, 東彼杵郡.

川戸湧也・長谷川悦示・木内敦詞・梶田和宏(2016)大学体育における柔道授業の現状に関する探索的研究: 国立大学のシラバス分析から.日本スポーツ教育学会第 36 回大会, 和歌山.

Etsushi Hasegawa, Atsushi Kiuchi, Yuya Kawato, Kazuhiro Kajita (2016) Analyzing and visualizing teaching-learning process to improve PE classes and teacher education. 2016 International conference for the 5th East Asian Alliance of Sport Pedagogy, Taipei.

〔図書〕(計 2 件)

橋本公雄・藤塚千秋・府内勇希(編著)(2018)アクティブな生活をととした“幸福を求める生き方”-ライフ・ウェルネスの構築を目指して-.ミライカナイ, 2018.3.20. Pp. 244.

西田順一(分担執筆)(2018)野外教育における質的研究, 量的研究の重要性.日本野外教育学会編, 野外教育学研究法.杏林書院.

〔産業財産権〕  
出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：西田 順一

ローマ字氏名：Nishida Junichi

所属研究機関名：近畿大学

部局名：経営学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：20389373

研究分担者氏名：木内 敦詞

ローマ字氏名：Kiuchi Atsushi

所属研究機関名：筑波大学

部局名：体育系

職名：教授

研究者番号（8桁）：40241161

研究分担者氏名：堤 俊彦

ローマ字氏名：Tsutsumi Toshihiko

所属研究機関名：大阪人間科学大学

部局名：人間科学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20259500

研究分担者氏名：山本 浩二

ローマ字氏名：Yamamoto Kouji

所属研究機関名：北九州市立大学

部局名：基盤教育センター  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 50560447

研究分担者氏名：藤塚 千秋  
ローマ字氏名：Fujituka Chiaki  
所属研究機関名：熊本学園大学  
部局名：社会福祉学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 90461251

研究分担者氏名：藤原 大樹  
ローマ字氏名：Fujiwara Hiroki  
所属研究機関名：保健医療経営大学  
部局名：保健医療経営学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 70596808

研究分担者氏名：山崎 将幸  
ローマ字氏名：Fujiwara Hiroki  
所属研究機関名：東亜大学  
部局名：人間科学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 80567199

研究分担者氏名：中須賀 巧  
ローマ字氏名：Nakasuga Takumi  
所属研究機関名：兵庫教育大学  
部局名：学校教育研究科  
職名：講師  
研究者番号(8桁): 10712218

研究分担者氏名：谷本 英彰  
ローマ字氏名：Tanimoto Hideaki  
所属研究機関名：大阪産業大学  
部局名：スポーツ健康学部  
職名：講師  
研究者番号(8桁): 60707321

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。